

一般社団法人電気学会 電力・エネルギー部門 ニュースレター

目次

用語解説	1
研究グループ紹介	2
学界情報	3
海外駐在記事	4
調査研究委員会レポート	5
論文誌目次／図書広告	6
学会カレンダー	7
図書広告	8

用語解説 第 187 回テーマ：雷電磁パルス(LEMP)

山中 章文〔(一財)電力中央研究所〕

1. 雷電磁パルス (LEMP) の概要

雷電磁パルス (lightning electromagnetic pulse, LEMP) とは雷放電により発生する電磁パルスのことであり、およそ数百 Hz から数百 MHz までの周波数帯の電磁波を含む。LEMP は、落雷位置の標定や雷放電の時間的・空間的な進展様相解明の研究などに活用されている⁽¹⁾。その一方で、高压配電線における雷事故や、電子機器などの破損・誤動作を発生させ得る現象でもある。また、架空線への雷撃により発生する過電圧にも、LEMP が影響を及ぼすことが明らかとなってきた。

2. LEMP により高压配電線に生ずる誘導雷⁽²⁾

帰還雷撃により生ずる LEMP は架空線に誘導雷を発生させる。誘導雷は、架空線近傍の大地や建物への雷撃によっても発生するため、架空線への雷撃と比べ発生頻度が高い。送電線と比べ絶縁レベルの低い高压配電線では、かつては誘導雷が雷事故原因の多くを占めた。しかし、我が国では誘導雷現象の解明とともに、架空地線や避雷器などの耐雷設備の整備が進められたことから、現在では誘導雷による雷事故はほとんど発生しない。このため近年では、高压配電線においても直撃雷対策が重要な検討課題となっている。

3. 架空線への雷撃における LEMP の影響

高压配電線や送電線などの架空線への雷撃が発生すると、雷撃を受けた架空線に雷電流が直接流れ込

むことで過電圧が発生し、雷事故に至る可能性がある。この一連の現象は、雷撃を電流源および雷放電路の等価インピーダンスで模擬することで、電気回路理論に基づき解析でき、耐雷設計や各種雷対策の検討に活用されてきた。一方、架空線への雷撃においても、LEMP に起因する誘導電圧が発生し、例えば送電線への雷撃により変電所に発生する過電圧に大きな影響を及ぼし得る⁽³⁾。近年では、計算手法の開発や計算機性能の向上により、架空線への雷撃においても LEMP の影響を明示的に考慮した解析が実施可能となっており⁽⁴⁾⁽⁵⁾、高压配電線や送電線、変電所の雷対策に向けた検討が進められている。

文 献

- (1) 吉田 智：雷放電の物理－絶縁破壊から電荷分離、メソ気象まで－，朝倉書店 (2024)
- (2) 雷リスク調査研究委員会 配電雷リスク分科会：「配電線耐雷設計ガイド (2023 年改訂版)」，電中研報告，GD22016 (2023)
- (3) 植田俊明・依田正之・宮地 巖：「77 kV 変電所で観測される侵入雷サージの特徴」，電学論 B, Vol.116, No.11, pp.1422-1428 (1996)
- (4) A. Tatematsu and T. Ueda : “FDTD-Based Lightning Surge Simulation of an HV Air-Insulated Substation with Back-Flashover Phenomena”, *IEEE TEMC*, Vol.58, No.5, pp.1549-1560 (2016)
- (5) A. Yamanaka, K. Ishimoto, and A. Tatematsu : “Incorporating the LEMP impact on lightning surge analysis of transmission lines in EMT simulators”, *IEEE TPWRD*, Vol.39, No.3, pp.1918-1930 (2024)

(2026 年 6 月 24 日受付)

研究グループ紹介

津山工業高等専門学校 持続可能エネルギーシステム研究室

桶 真一郎（津山工業高等専門学校）

1. はじめに

本研究室が本欄に登場するのは2度目で、前回は2016年であったことからちょうど10年ぶりとなる。当時、本研究室は津山高専の旧学科のひとつである電子制御工学科に所属していたが、改組により現在は総合理工学科電気電子システム系に所属している。本校の本科は総合理工学科のみの1学科体制であり、その中には電気電子システム系のほか先進科学系（物理・数学・生物・化学を学ぶ）、機械システム系、情報システム系がある。本科5年を卒業後に進学できる2年制の専攻科には電子・情報システム工学専攻と機械・制御システム工学専攻の2専攻がある。

2. 研究室の概要

本校では、本科4年次後期から研究室に配属される。人気のある研究室には毎年安定して5～6名が配属される一方、本研究室は学年によって希望者数のばらつきが大きい。第一希望の5名が配属された年もあれば、希望者が少なく、さらに4年次での留年や退学により本科卒業時には5年生が1名しか残らなかった年もある。図1に示す写真が2026年度前期の本研究室の学生だが、専攻科2年生が2名と本科5年生が3名（撮影日は5年生1名が欠席）の計5名と少数精鋭の陣容である。今年度も後期には4年生が新たに配属されるので、ぜひ意欲と元気のある学生に本研究室を志望してもらいたい。学生に選ばれる研究室を目指して日々、活動しているが、学生がどのような基準で研究室を選択しているのか皆目、見当がつかないのが悩みの種である。このことは10年前に本欄を執筆したときから進歩しておらず、我ながら情けない限りである。

3. 研究内容

本研究室は太陽光発電を中心としてエネルギーを「つくる」「つかう」「はかる」の三つの視点で研究に取り組んでいる。研究室内にはPVシステム研究グループ、PV安全化研究グループ、および電力システム研究グループの3グループがあり、学生はそれぞれに所属して学年をまたいで共同で研究に取り組んでいる。

PVシステム研究グループは、従来の太陽電池のほかに両面受光太陽電池やペロブスカイト太陽電池、集光式太陽電池などを用いた太陽光発電システムの開発を進めるグループである。現在は、太陽光発電システムの発電電力プロファイルを制御可能とするシステム構成や出力制御アルゴリズムの開発、フィールドでのペロブスカイト太陽電池の特性解析に取り組んでいる。図2はこのグループの実験の様子である。現在は所属する学生数が少ないので、他のグループのメンバーも協力して実験をすることが多い。

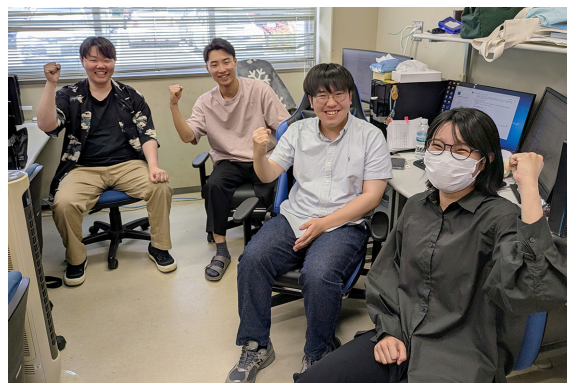


図1 研究室の学生たち



図2 両面受光太陽電池の実験の様子

PV安全化研究グループは、太陽光発電システムの安全性の向上に貢献する技術開発を進めている。現在は、多くの太陽光発電所を運営する発電事業者と共同でその性能の変化を評価し適切な運営管理をサポートするツールの開発や、太陽電池モジュールが備えるバイパス回路の故障を簡易に発見できる手法の開発に取り組んでいる。

電力システム研究グループは、主に太陽光発電システムの発電電力予測を扱っている。現在は、過積載太陽光発電システムが広域に分散設置されている場合にはたらく「ならし効果」がその発電電力予測に及ぼす影響を調べている。

高専は大学と比較すると、研究環境や人的資源の面で多くの制約がある。一方で、本科5年生は大学の学部4年生と、専攻科生は大学院修士課程の学生と、それぞれ遜色のない能力を備えていると日々感じている。こうした学生たちの潜在力を最大限に引き出すことは、高専で教育研究に携わる者の重要な使命のひとつであると考えている。

（2026年6月22日受付）

38th International Conference on Lightning Protection (ICLP2026) 報告

道下 幸志（静岡大学）

1. はじめに

第38回雷保護国際会議は、2026/5/31～6/5に札幌市中央区のKaderu2.7で行われた。期間中日本に台風が接近したが、札幌市は連日晴天に恵まれたのは不幸中の幸いだった。

2. 大会概要

世界情勢が不安定な中参加者の減少が危惧されたが、世界34か国からの365名の参加者が集まった。直近の5つの大会の参加者が300名以下であったことを考えると今回の参加者が多かった事が分かる。日本で行われるのは2回目であり、20年前の金沢大会では540名の参加者であったが、今回は2/3に減少した。今回の内訳は日本人159名、外国人206名であり、2006年は日本人372名、外国人168名であった。外国人は40名程度増えたものの、日本からの参加者が半減したことが参加者減少の要因であることがわかる。著者はこの大会の現地実行委員長を務めたが、海外に対して事前の学会で宣伝活動に努めた効果が表れた一方で、日本での活動が不足していたのは反省材料である。

招待講演はICLP本部会長のボローニャ大学 Nucci 教授が“The importance of LEMP effects on the lightning response of overhead distribution lines - from first studies to recent advancements”という題目で行った。誘導雷から直撃雷まで多岐にわたる講演で、誘導雷の解析モデルから、近年注目されている電圧階級の異なる配電線が同一の鉄塔に併架される場合にも話がわたっており、配電線の雷保護の今までを知る上で重要な講演であった。

特別講演は筆者が“Current and electric field measurement for lightning protection design of electrical power facilities”という題目で、東北工業大学の佐藤智之教授が“Aspects of Lightning Damage Caused by Winter Lightning in Japan”という題目で行った。前者は、電磁界と雷電流の相関や日本海沿岸における雷性状の特殊性についての実測データに基づく講演で、後者は東北地区で調査された雷被害についてのその被害の特殊性及び規模の大きさについての講演であった。

招待講演及び特別講演は、多くの聴衆から質問が出て非常に有意義な講演であったとの声が寄せられた。

図1には特別講演後に撮影されたグループ写真を掲載している。前列左から2番目が筆者、3番目が Nucci 教授、2列目右端が佐藤教授である。

一般公演として採択された論文数は216件であったが、大会開始までに主として中国からの参加者が渡航できない旨を申し出てきたため、ICLP本部と協議の上、急遽オンラインでの発表の機会を設けた。No Showは13件発生したも



図1 グループ写真

の、203件の発表があった。採択された論文の内訳は、口頭発表166件、ポスター発表50件であった。ICLPは基本的にはSC (Scientific committee) が運営も担当している。論文査読は今回から現地実行委員会が組織する論文委員会ではなく、SC直下のTC (Technical committee) が担当する事になった。これは論文の質維持を目的としたものである。今回は39カ国から268件の投稿があった。TCとしては、評価の高い論文を口頭発表にしたかったようであるが、日本で高レベルの論文を書いた著者がポスター発表を志向する場合があったため、最終的には高評価の論文の著者の希望を優先する事になった。一番投稿数が多かった分野は電力システムの雷保護(28件)であり、続いて雷物理・雷現象(22件)であった。再生可能エネルギーなど雷保護分野の研究発表は82件あり、雷性状関連の論文は49件あった。

今回のICLPの特徴は、若手研究者の登用にあった。SCメンバーの多くが定年を迎える中、組織の若返りを図る必要があるとの共通認識のもと、Susana Naranjo-Villamil氏とLukas Schwalt氏をTCの委員長とし、また、新たにSocial Mediaを通じた活動も若手を中心に実施した。

また、国内委員会としても実務的な準備において若手にノウハウを継承してもらう事を目的に、委員長の元に委員長補佐会議を発足して頂いた。メンバーは、中村綾花先生(静大)、古賀佳康氏(音羽電機工業)、鈴木義夫氏(電気設備学会)、米澤要氏(サンコーシヤ)、松井倫弘氏(フランクリン・ジャパン)、三木貫氏(電中研)、深山康弘氏(昭電)である。同会議のメンバーの活躍なくしては、今回世界のSCメンバーや研究者から多くの賞賛を頂いた会議を実施する事は不可能であった。厚くお礼申し上げて本報告の結びとする。

次回は2028年6/4-6/9にギリシャのテッサロニキで実施予定である。

(2026年7月3日受付)

海外駐在記事

オランダ駐在記

高田 翔午〔中部電力(株) Chubu Electric Power Company Netherlands B.V. 出向〕

1. はじめに

筆者は、Shell (英)、Eneco (蘭)、弊社が出資するオランダの洋上風力発電プロジェクトに、2024 年 7 月より電気エンジニアとして携わっており、現在オランダに駐在している。本稿では、携わっているプロジェクトの概要およびオランダでの生活について紹介する。

2. プロジェクト概要

オランダ沖約 53 km の北海において、52 基の風車を設置する洋上風力発電プロジェクトが進められている。発電設備の合計出力は 76 万 kW に達する計画であり、オランダ国内の電力需要の約 3% に相当する規模である。プロジェクトは 2025 年末より製造段階から洋上での建設フェーズへ移行し、基礎構造物、海底ケーブル、風車の順に施工が進められ、2026 年末の商業運転開始を目標としている。

本プロジェクトの特徴の一つとして、海洋生態系の保護に配慮した取り組みが挙げられる。例えば、基礎打設時の騒音を低減する技術を採用することで海洋哺乳類への影響を抑制するほか、渡り鳥の飛行ルートを検討した風車配置が計画されている。また、渡り鳥の活動時期に応じて風車の稼働を抑制するなど、環境影響を低減するための運用上の取り組みも計画されている。

さらに、本プロジェクトでは建設コストの抑制を目的として、EPCI (設計・調達・建設・据え付け) コントラクターによる一括契約ではなく、主要設備の製造および建設工事を個別に発注する方式が採用されている。このため、多数のコントラクター間でのインターフェース調整が必要となる一方、各コントラクターと直接連携できる点が特徴である。

筆者は海底ケーブル関連業務に関与しており、ケーブルの製造、敷設および接続に関する技術検討や工程調整を担当している。ケーブル製造を担う工場が新設設備であることから、日々スケジュール、品質、安全に関する課題への対応が求められている。また、ケーブル敷設会社とのインターフェースにおいても技術的な調整事項が多く、ケーブルおよびジョイントのサプライヤーを含む関係者と連携しながら業務マネジメントを進めている。

プロジェクトメンバーは国籍やバックグラウンドが多様であり、相互理解を重視しながら課題に対してチームで解決に取り組む文化が根付いている。また、役職や年齢に関わらず意見を述べやすいフラットな組織風土も特徴の一つである。

3. オランダでの生活

プロジェクトオフィスが近接する都市であるデン・ハーグに筆者は滞在している。デン・ハーグは国会・王宮・各



図 1 基礎モックアップ (試作) 現場にて (左：筆者)

省庁の政府機関、国際司法裁判所や国際刑事裁判所などの国際機関に加え、各国の大使館が集まる都市として知られ、多くの外国人が暮らす国際的な都市である。オランダ語で人に話しかけても英語で返答されることが多く、日常生活において英語が広く通用する。多様な文化背景を持つ人々が暮らしており、比較的生活に溶け込みやすい点はこの国の魅力の一つである。

オランダは北海道より北の、樺太と同程度の緯度に位置しているが、暖流の影響を受けた海洋性気候のため冬でも気温が氷点下になることは少ない。一方で、数センチの積雪でも電車や航空機などの交通機関が乱れるなど、雪にはあまり強くない側面もある。夏は日本のような猛暑になることは少なく、最高気温も 25℃前後で比較的過ごしやすい。日照時間も長く、夏は夜 11 時頃まで明るい日が続く、気が付くと日付が変わっていることもしばしばある。

また、街中には自転車専用道路が整備されており、多くの人が日常の足として自転車を利用している。北海から吹き付ける強い風や雨の日でも自転車に乗る人々の姿が多く見られ、合理的で実用的なオランダ人の気質を感じる場面でもある。さらに、オランダは風車を利用した干拓や堤防の整備によって国土を拡張してきた歴史を持ち、「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」と言われることもある。海と向き合い、風とともに生きてきた国であり、その風は、かつては風車を回し、国土を守り、そして今日では人々の明かりを灯す源として利用されている。オランダの風景には、歴史と技術が静かに重なっている。

4. おわりに

本プロジェクトを通じて、筆者は多くの貴重な経験を得る機会をいただいている。ここで得た知見を少しでも今後の日本の電力事業に活かしていきたいと考えている。

(2026 年 5 月 27 日受付)

調査研究委員会レポート

イノベーション創出を目指した先駆的電磁界解析技術調査専門委員会

委員長 阿波根 明

副委員長 岡本 吉史，幹事 比留間真悟，幹事補佐 羽根 吉紀，長嶺 英朗

1. はじめに

地球環境負荷の低減に向けた省エネルギー化は喫緊の課題であり、電気機器の小型化および高効率化に向けた種々の取り組みが展開されてきた。その設計開発過程において、電磁界数値解析シミュレーション技術は多大な貢献を果たしている。

しかし、近年のEVに代表される社会全体の電動化の加速に伴い、従来の技術体系のみでは限界が生じつつある。今後は、機器の構造や材料、さらには制御方式までを統合した抜本的な技術革新が不可欠である。このような背景から、電磁界解析は単なる数値シミュレーションの枠組みを超え、それらを包含する統合的なシステムとしての高度化が強く求められている。

本調査専門委員会では、電磁界解析を用いた電気機器の設計開発における基盤技術を概観するとともに、新たな技術課題の解決およびイノベーション創出に向けた次世代電磁界解析技術のあり方について調査検討を行う。

2. 活動内容

これまで電磁界解析に関する計算手法の研究開発は精力的に進められ、現在も国内外の会議や研究会において活発な議論が交わされている。こうした状況を鑑み、本調査専門委員会では主に以下の解析技術について調査検討を行う。

(1) 電磁界解析における大規模高速化・高精度化技術

これまでに領域分割法やGPUの活用、TP-EEC法などの導入により、大規模並列計算や高速化が実現され、電気機器のマクロな効率や損失の評価に加え、局所的な磁束の集中や、高精度な損失分布といったミクロな視点からの機器評価の重要性が高まっている。また、電気機器の複雑化に伴い、解析モデルは大規模化の一途を辿っている。さらに、誘導機等に代表される多時刻ステップ計算を要する対象は計算負荷が高く、これらの課題を打破する技術開発が不可欠である。本委員会では、これらの課題に対応するための最新技術に関する調査検討を行う。

(2) 異常損を含む磁性材料モデリングとその応用

電気機器には磁気非線形性を有する磁性材料が多用され、非線形方程式を求解することで、機器の特性や損失の高精度な評価が確立されてきた。特に、ヒステリシスモデリングとその磁界解析手法の進展は目覚ましい。しかし、機器の高周波化に伴う異常損モデリング等の課題は十分に解決されたとは言い難く、本委員会では最新の知見と解析技術に関する調査検討を行う。

(3) AIを融合させた次世代電磁界解析技術

近年のAI技術の発展は極めて顕著であり、電磁界解析の

分野では最適化設計、メッシュ生成、磁性材料モデリングなど各要素技術への導入が加速している。AI技術との融合は今後の電磁界解析において最も発展が期待される領域の一つであり、本委員会ではAI活用技術の普及と深化を推進すべく適用事例や手法の有効性について調査検討を行う。

(4) 実用的な最適化計算の技術開発

近年、多目的、トポロジー、マルチフィジックス最適化といった多種多様かつ複雑な最適化手法の需要が高まっており、高度なアルゴリズム開発が精力的に進められている。また、モデル縮約等による高速解法の開発も継続されている。しかし、設計現場へ適用するためには、広範な探索空間における大域的最適解の導出や、膨大な計算時間の短縮といった課題を克服しなければならない。本委員会では高度な最適化アルゴリズムの調査に加え、モデル縮約法、プラントモデル、代理モデル等の導入による計算負荷低減技術による設計開発プロセスへの寄与を目指した調査検討を行う。

(5) 電磁界解析の各種適用分野に向けた要素技術開発

パワエレ用機器、永久磁石の磁化推定および非接触給電など、必要とされる電磁界解析の要素技術は多岐にわたる。本委員会では、特定分野における解析手法の開発状況の調査と、その妥当性や性能評価についても調査検討を行う。

3. これまでの活動状況と今後の計画

本調査専門委員会は2025年4月の発足以来、7回の委員会開催と2回の静止器・回転機合同研究会を共同開催した。今後も年間7回程度の委員会と2回の研究会を開催する計画である。これらの活動を通じて、本委員会の調査目的に沿った研究調査を推進するとともに、得られた成果を技術報告等として体系的にまとめ、発信していく予定である。

委員会構成メンバー

委員長	阿波根明 (JSOL)
委員	五十嵐一 (北海道大)、池田文昭 (フオトン)
	岩下武史 (京都大)、上原裕二 (磁気デバイス研究所)
	大友佳嗣 (長崎大)、貝森弘行 (サイエンスソリューションズ)
	高 炎輝 (大分大)、北尾純士 (三菱電機)
	佐々木秀徳 (法政大)、笹山瑛由 (九州大)
	佐藤孝洋 (室蘭工業大)、佐藤佑樹 (芝浦工業大)
	佐野広征 (JSOL)、菅原賢悟 (近畿大)
	杉本振一郎 (八戸工業大)、高橋康人 (同志社大)
	武居 周 (宮崎大)、難波雅史 (豊田中央研究所)
	野口 聡 (北海道大)、羽野光夫 (山口大)
	日高勇気 (立命館大)、藤田真史 (東芝)
	牧 晃司 (日立製作所)、美松 健 (京都大)
	宮城大輔 (千葉大)、宮田健治 (元日立製作所)
	村松和弘 (佐賀大)、山下真直 (住友電気工業)
	若尾真治 (早稲田大)
副委員長	岡本吉史 (法政大)
幹事	比留間真悟 (北海道大)
幹事補佐	羽根吉紀 (東洋大)、長嶺英朗 (岐阜大)

目次

電力・エネルギー部門誌 2026 年 10 月号

(論文誌電子ジャーナル版 <https://www.iee.jp/pub/journal/>)

〔解説〕

SF₆代替ガス開閉装置の適用性 ……………笹森健次

同期調相機モデルにおける横軸過渡リアクタンスが
位相角安定性の解析結果に及ぼす影響

……………青木 廉, 天野博之

〔論文〕

宅配車両を対象とした商用 EV 交通シミュレータの開発

—CO₂削減効果の評価—

……………高木雅昭, 高橋雅仁, 池谷知彦,

荒木伸太, 志村泰知, 伊野慎二

洋上風力発電用直流送電におけるリアクトル集約形

HB-MMC を用いた事故保護手法

……………若月圭真, 佐野憲一朗, 梶山拓也

エリア慣性推定の観点での効果的な計測装置配置の

選定手法 ……………川村智輝, 天野博之



電気施設管理と電気法規解説 14版改訂

平野正樹 編著

本書は、電気主任技術者に不可欠な電気施設全体の管理に関する基礎知識と施設管理の規範となる法令に関する知識の提供を目的に、大学・高専の教科書・参考書として活用されてきたものの最新改訂版です。再生可能エネルギーの普及に伴う需給調整や保安面の新たな課題、電力市場整備の進展、デジタル情報技術の普及に伴う施設管理への活用と課題等、電気事業や電気施設を取巻く最近の環境変化を踏まえ、この度大幅に内容を刷新した14版改訂を発行しました。

〔目次〕 序論／第1章 総論／第2章 電力需給計画および調整／第3章 電気施設の建設と運用
第4章 電気料金と電力市場／第5章 電気関連法規／第6章 電気設備技術基準とその解釈／電気主任技術者試験問題の例



A5判 並製 328頁 定価3,080円 ISBN 978-4-485-67047-7

○全国の書店、ネット書店でお求め下さい。

○10月より発行・発売元が電気学会より㈱電気書院に変更になりました。価格・体裁・内容はこれまでと同様ですが、ISBNが変更になっていますので、ご注文の際はご注意ください。

学会カレンダー

国際会議名	開催場所	開催期間	URL, 連絡先, 開催・延期・中止の情報	アブストラクト	フルペーパー
2026 4th International Conference on Power and Renewable Energy Engineering (PREE)	東京 (日本)	26.10.3～6	https://www.pree.net/index.html	—	26.8.25 済
TENCON 2026 (IEEE Region 10 Conference 2026)	バリ (インドネシア)	26.10.10～13	https://tencon2026.ieee.id/	—	26.5.19 済
15th International Conference on Renewable Energy Research and Applications (ICRERA)	バリ (フランス)	26.10.12～15	https://www.icrera.org/	—	26.9.1 済
IECON 2026 (The 52nd Annual Conference of IEEE Industrial Electronics Society)	ドーハ (カタール)	26.10.18～21	https://www.iecon2026.org/	—	26.7.31 済
ISGT Europe 2026	ブダペスト (ハンガリー)	26.10.19～22	https://iee-isgt-europe.org	—	26.4.15 済
2026 2nd International Conference on Power Engineering and Electrical Technology	大阪 (日本)	26.10.28～30	https://icpeet.com/	—	26.7.30 済
IEEE ISGT Asia 2026	武漢 (中国)	26.10.30～ 11.1	https://attend.ieee.org/isgt-asia-2026/	—	26.8.20 済
2026 6th International Conference on Smart Grid and Energy Internet (SGEI)	宜昌 (中国)	26.11.13～15	https://www.sgei.info/	—	26.8.28 済
PVSEC-37 2026 (WCPEC-9)	大田広域 (韓国)	26.11.15～20	https://wcpec-9.com/en/main	26.7.20 済	—
2026 IEEE 2nd International Conference on Smart Power Control and Renewable Energy (ICSPCRE)	オディシャ (インド)	26.12.4～6	https://icspcr.org/	—	26.8.20 済
The 16th International Conference on Power and Energy Systems (ICPES 2026)	西安 (中国)	26.12.4～6	https://www.icpes.org/	—	26.9.1 済
24th National Power System Conference NPSC 2026	パトナ (インド)	26.12.12～14	https://npsc2026.in/	—	26.7.31 済
2026 IEEE International Conference on Power Electronics, Drives and Energy Systems (PEDES)	グワーハータイー (インド)	26.12.16～19	https://www.pedes2026.org/	—	26.6.30 済
The 21st IET International Conference on Developments in Power System Protection APAC	香港 (香港)	27.1.6～9	https://dpsp.theiet.org/2027-apac	—	26.9.4 済
IEEE Power & Energy Society (PES) International Meeting	北京 (中国)	27.1.10～13	https://www.pes-im.org/	—	26.8.15 済
2027 IEEE Electrical Energy Storage Applications and Technologies Conference (EESAT)	フロリダ (米国)	27.1.11～12	https://cmte.ieee.org/pes-eesat/	26.4.20 済	26.8.3 済
2027 3rd International Conference on Power Electronics and Electric Drives (PEED 2027)	南京 (中国)	27.2.27～28	https://www.icpeed.com/	—	26.11.15
The 17th International Conference on Power, Energy, and Electrical Engineering (CPEEE)	横浜 (日本)	27.3.5～7	https://www.cpeee.net/	—	26.9.15 済
2027 International Conference on Intelligent Computing and Control Systems (ICICCS)	マレ (モルディブ)	27.3.22～24	https://iciccs.com/2027/	—	26.12.26
International Electric Machines and Drives Conference (IEMDC)	ミルウォーキー (米国)	27.5.17～20	https://www.iemdc.org/	—	26.11.1
8th International Conference on Electric Power Equipment -Switching Technology- (ICEPE-ST2027)	新潟 (日本)	27.5.30～6.2	https://icepe2027.nuee.nagoya-u.ac.jp/	26.8.28 済	26.12.4
International Conference on Power Systems Transients (IPST)	ボローニャ (イタリア)	27.6.6～10	https://ipst2027.org/	未定	未定
CIRE2027 International Conference & Exhibition on Electricity Distribution	ストックホルム (スウェーデン)	27.6.14～17	https://2027.cired.net/	26.9.14 済	27.1.22
The 7th International Conference on Electrical, Computer and Energy Technologies (ICECET)	ソウル (韓国)	27.7.9～12	https://www.icecet.com/	—	27.1.12
IEEE PES General Meeting 2027 (PESGM)	サンフランシスコ (米国)	27.7.25～29	https://pes-gm.org/2027-san-francisco/	—	26.11.10
The 25th International Symposium on High Voltage Engineering (ISH2027)	テッサロニキ (ギリシャ)	27.8.29～9.3	https://ish2027.gr/	26.11.8	27.3.1
The 62nd International Universities Power Engineering Conference (UPEC2027)	ラルナカ (キプロス)	27.8.31～9.3	https://cyprusconferences.org/upec2027/	—	27.4.30
IEEE PowerTech 2027	ブルージュ (ベルギー)	27.9.5～9	https://powertech2027.com/	—	27.2.15
IEEE PES GTD Asia 2027	メルボルン (オーストラリア)	27.9.29～ 10.2	https://www.ieeeetd2027.org/	—	27.2.1
CIGRE 2027 SC A3 & B3 Joint Colloquium	東京 (日本)	27.10.25～29	https://cigre-jc2027.jp/	27.3.12	—
2028 IEEE PES Transmission and Distribution Conference and Exposition (T&D 2028)	アトランタ (米国)	28.4.24～27	https://ieeet-d.org/	未定	未定

*連絡先: 古梶 雅裕 (山口東京理科大学, furukakoi@rs.socu.ac.jp) 2026 年 12 月以降に開催予定の国際会議の情報がありましたらお寄せください。